

## 第3節 高崎市東南部、倉賀野・佐野地域の古墳形成と発展

梅 沢 重 昭

### 1 烏川左岸沖積平野の遺跡分布

洪積世末期に浅間山の火山活動に起因する大規模な泥流層が基盤層となって形成される群馬県中央部の沖積平野は、その中央部を榛名山南麓に源をもつ井野川によって東西二つの地域に地勢区分される。この東の地域は、いわゆる前橋台地で、北から東縁を旧利根川の氾濫原に境され、前橋市街地付近から東南方向に延びる河崖が伊勢崎市宮古町付近に達しており、これに対応するように、西縁を井野川によって侵蝕された河崖が高崎市島野町付近から南に延びて、八幡原町地先の烏川合流点付近に達し、南側を劃する烏川の河崖に連続する。旧利根川・井野川、そして烏川に面する前橋台地周縁の地は高燥な地形を形成し、その台地中央部に向って湿潤な沖積地が広がっている。前橋台地の遺跡分布は、概ねこの台地周縁の高燥地を中心に拡がりが見られ、それも古墳時代以後のものが主体で、弥生時代の終末期までは烏川沿いの一部を除いて、ほとんど遺跡は存在しない。井野川以东の前橋台地地域は、弥生時代の終末期ごろまで、ほとんど無住の地域だったのであり、地域形成が進むようになるのは、古墳時代の到来を待ってであった。

ところが、この前橋台地にたいして、井野川西方の地域は、その西から南縁を烏川に劃され、高崎市並榎町付近から高崎市岩鼻町に連なる河崖が発達し、これに対応するように東縁の井野川寄りには、井野川支流の粕川の河崖が高崎市柴崎町から岩鼻町台新田地区にかけて発達しており、この烏川・粕川にかこまれて台地状の地形を形成している。この台地状の地は、井野川以东の前橋台地に対して、“倉賀野台地”と呼ぶのが適わしいであろう。この倉賀野台地も前橋台地と同様に周縁部、特に烏川沿いに高燥な地形を形成し、内奥部に湿潤な沖積地を発達せしめている。しかし、水系的には榛名山南麓の扇状地末端に発達した網状流の一部が台地内に流入しており倉賀野台地の内奥部には各所に小規模な谷地形が分布し、なかでも、江木町付近から中居町・矢中町・栗崎町にかけて、低湿地帯が広がっており、小規模な島状の微高地形が分布している。

#### (1) 弥生時代の遺跡分布

このような、地形的な条件に恵まれて、倉賀野台地内の遺跡分布は、弥生時代中期後半ごろから急激に増加する傾向が認められる。竜見町期の遺跡としては、巾遺跡・日光町遺跡・江木遺跡・競馬場遺跡・頼政神社付近遺跡・城南小校庭遺跡・竜見町遺跡などが早くから知られており、近年になってからも、中居団地の造成地内や、上佐野町地内における上越新幹線地域内の調査等においても当該遺跡の存在が確認されている。これらの竜見町期の遺跡立地で共通している点は、台地内に形成された小規模な谷地に面した微高地を選んで営なまれているということである。このことは竜見町期になっての「倉賀野台地」への集落進出が、自然灌漑による谷地水田の耕作という技術的水準にあった当時の稲作農耕に適した小規模な谷地形を各所に分布せしめているという自然環境によっていたからと思われる。弥生時代中期終末から後期初頭にかけて高崎市周辺の

平野地域における農耕社会が急速に成長し、地域形成が進展したことをうかがわせるのである。この後を受けての弥生時代後期、樽期の遺跡の分布は、中居町地内に確認されているが、竜見町期に比して稀薄な感はまぬかれない。樽期の遺跡が濃密な分布を示しているのは、台地北縁の地で、烏川寄りの地域では並榎町付近を中心にしており、上佐野町付近にも散見できず、井野川、粕川寄りの地域では井野町付近に多く認められているが、下流域になるにしたがって稀薄で、南限は粕川東側の綿貫町堀米南遺跡で、樽式土器が石田川期集落地から確認されているにすぎない。台地の東部から東南部を占める柴崎町から岩鼻町にかけては、現在のところ樽期の集落遺跡は確認されていない。また、南部の下佐野町から倉賀野町にかけても明らかでなく、倉賀野台地の南半部分は前橋台地と同様に弥生時代後期には、ほとんど無住の地域であったことが推定される。弥生時代後期の遺跡は、台地の西北部を中心に榛名山南麓からの水系が取り付く付近の網状流の発達した地にほぼ限定されている。小規模な谷地などを利用した自然灌漑水田を営みやすい土地が、弥生時代の農耕社会の基盤となっており、そこを踏み出すような状況はまだ弥生農耕社会には生れていなかったのであろう。

#### (2) 石田川系土器文化の進出

ところがこのような状況にあった倉賀野台地にも、弥生時代の終末期頃から、外来系の土器文化が急速に拡まっていった。いわゆる石田川式土器と呼ばれる土器群である。この石田川式土器を出土する遺跡地は、台地の周縁の高燥地を中心に分布しており、特に上佐野～下佐野町一帯や、中居町、柴崎町や岩鼻町台新田一帯に認められる。台地の弥生時代遺跡の稀薄地域に分布の主体があるかのようである。烏川寄りの上佐野町地内では、山崎病院東側隣接地でかつて田島桂男氏によって採集された複合口縁壺形土器が石田川期の土器として知られているが、この土器の出土地点は、今次の調査で、旧佐野村18号墳（前方後方墳）の前方部西方に位置する寺前地区第3号方形周溝墓の一部であることが推定された。下佐野町翁地内では、単口縁壺形土器が採集されているが、この土器は底部に靫痕を残したもので、また肩部には樽式土器の影響を強くとどめている波状文をめぐらしている。優勢な外来系の石田川式土器を母胎にしながらも、在来系の土器文化の残映が認められるものである。一方、井野川寄りの地域では粕川の河崖に接して位置した柴崎町蟹沢古墳出土と伝えるものに石田川期の複合口縁壺形土器、複合口縁台は甕形土器、高坏などの破片がある。また綿貫町地内現在の日本原子力研究所高崎研究所敷地内からも複合口縁台付甕、高坏の出土が知られている。

最近、この倉賀野台地地区でも発掘調査が各所で行なわれているが、それらのなかで、石田川期の集落遺跡のあり方を示しているものとして注意されるのに、倉賀野町万福寺遺跡と矢中町村東遺跡とがある。前者は、烏川の河崖縁に近く分布する遺跡で、大鶴巻古墳の前方部南面に分布している。縄文時代中期の住居址等も発見されているが、この地に再び集落が形成されるのは石田川期のものであり、石田川期の集落形成が他からの移住による開発型の様相をもって展開した様子がうかがえる。調査面積6,013㎡の範囲内において、13軒の住居址、方形周溝墓12基が発見、

調査されている。住居址の多くは1辺が5m前後のものを普通としているが、なかには1辺が3mの小形のものも含まれる。床面プランは方形のもの4軒、長方形のもの3軒が確認されている。そこでそれらの住居址と混在し、あるものは、重複する形で方形周溝墓が分布している。方形周溝墓の規模は、小形のもので方台部が一辺6mに満たないものもあるが、7m～8m前後のものが一般的である。しかし、方台部の一辺が21mを超えるきわだって大形のものも存在し、その方形周溝墓を形成した村落社会のなかに村首長的性格をもった有力者層が出現していたことをうかがわせる。万福寺遺跡の各住居址や方形周溝墓から出土した土器数は、複合口縁壺形土器が概して個性的な特徴をとどめ、バラエティーに富んでいるが、甕形土器は南関東的な色彩をとどめている単口縁形のものの一部に存在するものの、主流は複合口縁形で、胴肩部に一周する櫛描・沈線をめぐらしたものと、めぐらさないものと峻別できる。器台形土器や高坏形土器の器形も、前者は脚部の張りが大きく広がるものと、広がらないもの、後者は有段受け皿と碗形受け皿の形態を示すものにわけられるように、これらも2種類が存在する。これらの土器類の特徴から万福寺遺跡の土器群は、形式的には前後2期に区分でき、特に壺形土器において、東海西部地域（濃尾平野）の弥生時代終末期の土器様式の伝統を強く残しているものが認められる。東海西部地域を源流とする土器文化の進出が優勢に展開したことをうかがわせるのである。

矢中村東遺跡もこの万福寺遺跡と同様な性格を示す集落遺跡と推定される。粕川の河崖縁辺に寄った地に位置する遺跡地の一部から方形周溝墓1基が確認されており、口縁部が小さな折かえしとなっている複合口縁壺形土器や、小形台付複合口縁甕形土器等が出土している。この矢中村東遺跡においても、弥生時代終末期の遺構・遺物類は明らかでなく、石田川期になって急速に形成された外来系の集落遺跡であることが推定できる。

倉賀野台地における石田川期の集落遺跡の分布は、その西南部から南部の烏川沿いの地や東南部の粕川沿いの地に、極めて独自性の強い様相、すなわち、無住地への入植・開拓という性格をもって出現した集落遺跡という色合いをうかがわせるのである。石田川期の外来系集落は、弥生時代後期からの在地的な農耕社会との間に一線を保っており、その農耕社会を独自に形成していったものと考えられるのである。こうした石田川期の農耕社会が成立したことを契機として、台地内奥部の在地的農耕社会はその影響を強く受け、変ぼうしていったものと推定される。

このような展開をみた倉賀野台地地域の石田川期の集落社会の実相をより具体的にうかがわせる一つに、今次の調査において明らかにされた上佐野町～下佐野町に所在する遺跡がある。

## 2 下佐野遺跡の石田川期集落

第2章で詳述しているところであるが、今次の調査で明らかにされた遺跡地は、下佐野町地内の烏川沿いに面した約1200mにわたり分布している。上越新幹線地域内に限定された調査であることから、その広がりも推定の域を出ない。烏川左岸の河崖縁に広がる高燥地は、広いところで約350m、狭いところで約250m、長さ1500mにわたって延びている。この高燥地に面して東方には

### 第3章 調査の成果と問題点

湿潤な沖積地が広がり、上佐野町東方から下之城町・中居方面に連なり、台地の内奥に延びている。そしてその沖積地を北から南に延び烏川に流出する小谷・粕沢川が位置している。倉賀野万福寺遺跡は、この沖積地の東南端から東方に延びる烏川左岸河崖縁の高燥地の西端に近く分布する遺跡である。粕沢川流域の沖積地を囲むように石田川期集落が形成されたことが推定される。

今次の調査で明らかにされた石田川期の遺跡の分布は、南北1200mの範囲にあって、ほぼ2地区に大別できる。その一は、I地区A区とII地区との境界付近を中心に分布し、発掘区内では17軒が確認されている。その二はI地区A区北端からI地区B区を経てI地区C区南端にいたる約200mの範囲で、下佐野地域での石田川期集落は、この地区に集中しているかの感がある。29軒が発掘区において確認された。これらの住居址の分布状況は、下佐野長者屋敷天王山古墳を南限とし、その墳丘下から重複する5軒の住居址が少し離れて位置していたが、住居址分布の主体はI地区B区の南半に4軒、北半約70mの一部からI地区C区にまたがり19軒が集中して分布していた。I地区C区南半部には、I地区B区群より30m近く離れて4軒が存在していた。発掘区内の所見では、石田川期の集落分布の中心は、I地区B区、すなわち、下佐野長者屋敷天王山古墳の北方約200mの範囲に集中しており、南北に分れ、2支群を構成しているかの様相がある。そしてその南方に約230m離れてII地区・I地区A区の境界付近に他の集落を構成する住居址群の分布が推定される。このことを根拠にあえて、推論するならば、下佐野地区の石田川期の集落形成は、烏川左岸の河崖縁の高燥地に少なくとも2つの地に分れて展開した様相がうかがえる。そうしたなかで、I地区A区～C区の分布のあり方は、南北に分れて2つの小群を形成しているかのように看取できるのである。

これらのI地区A区～C区に分布する住居跡、29軒について、その重複関係を見ると、天王山古墳墳丘下の住居址5軒のうち、A区39号住居跡、A区38号住居跡、A区36号住居跡は継起的関係をもって位置していることが明瞭で、石田川期の存続期間にA区39号住居跡を最初に次にA区38号住居跡、最後にA区36号住居跡と少なくとも3回の竪穴式住居の建て替えがなされていることが指摘できる。このような3回にわたって建て替えがなされている住居跡群は、B区10b号住居跡→B区16号住居跡→B区10a号住居跡という一群も推定できる。一方、前後2回にわたる重複関係を示しているのは、41b号住居跡→41a号住居跡、12b号住居跡→12a号住居跡、8号住居跡→24号住居跡、4d号住居跡→4c号住居跡である。建て替えが3回におよんでいるのは4か所、前後2回にわたって重複しているのも4か所において存在している。このことは、石田川期の期間が住居の建て替えが多くて3回、少くとも2回はなされなければならない年月にわたっていたことをうかがわせる。単純な計算ではあるが、このことから推計して、石田川期の集落規模は、実際に発見される住居跡数の3分の1から2分の1程度で、年月の経過とともに漸増の方向をたどったものと推定される。

ところで、各住居跡の規模についてみると、床面積が44㎡以上の大形住居跡は、I地区B区16号住居跡と12a号住居跡である。これに次ぐ規模の住居跡は床面積が35㎡～40㎡前後のもので、

I地区B区4c号住居跡、25a号住居跡、17号住居跡、32号住居跡等4軒が該当する。これらの住居跡の分布状況を見ると、ほぼ2地区に分れて集合する傾向が見られ、10a号住居跡、17号住居跡、32号住居跡のグループ、28号住居跡、37号住居跡、41a号住居跡のグループが存在する。これらの床面積35㎡～40㎡に較べるとやや小形で、25㎡～35㎡の面積を有する住居跡は、A区35号・A区36号・A区38号・A区74号・B区10a号・B区39号・B区32号・B区14号・B区28号・B区41a号・C区1号・C区13号住居跡等12軒が該当する。これらのうち集合状況を強く示しているのは、天王山古墳墳丘下に存在した重複関係にあるA区35号住居跡、A区36号住居跡、A区38号住居跡、A区39号住居跡の4軒である。床面積15㎡～21㎡の住居跡は、B区6号住居跡、B区8号住居跡、B区24号住居跡、A区72号住居跡、A区73号住居跡、A区4d号住居跡等6軒が該当する。これらの住居跡は2地区に分れて分布する傾向がうかがえ、B区4d号住居跡・B区6号住居跡、B区8号住居跡、B区24号住居跡は、I地区B区に存在するこのクラスよりも小形の15㎡未満のものは、A区37号住居跡、B区31号住居跡、B区41b号住居跡等3軒が存在するが、最小規模のB区31号住居跡は9.0㎡前後の面積を推定できる。

このような住居跡の床面積の相違が、同一集落群において認められることは、石田川期の集落を構成する村人のあいだに家族間の較差が生まれていたことをうかがわせる。石田川期の集落は開拓者集団の営なんだ村落として、村首長を中心とする村落社会の秩序が成立していたのであろう。

このことを如実に示しているのは、集落隣接地に分布する周溝墓群である。

### 3 下佐野遺跡における周溝墓群と前方後方墳

下佐野遺跡において発見された周溝墓は、I地区A区と、I地区C区とに集中的に分布していた。この他、II地区や、寺前地区からも発見されたが、これらの地区では発掘区が狭く、一部が明らかにされたにすぎない。しかし、その分布状況から見て、II地区にはI地区A区、C区とは別の周溝墓群の存在が推定されるものの、寺前地区でのあり方は6号古墳に付随する位置にあり、地形的にも他に多くの周溝墓群の存在を認められるような条件にない。寺前地区には約60mの間隔を置いて占地する寺前地区6号古墳、寺前地区9号古墳という前方後方形の大形墳墓が位置しておりI地区A区・C区や、II地区の周溝墓群とは性格を異にする墳墓群の存在が認められる。

このような下佐野遺跡における周溝墓群の分布は、まず、I地区A区・C区のものが、その間にI地区B区を中心に分布する石田川期住居跡群を挟んで、その南北に位置していることが注意される。前述したようにI地区B区の住居跡群の分布も南北に二分される構成がうかがわれ、I地区A区の周溝墓群はその南半部を中心に位置する住居跡群と、I地区C区の周溝墓群はその北半部を中心に位置する住居跡群との関係が濃厚である。いずれにしてもI地区A区・C区の周溝墓群がI地区B区を中心に分布する住居跡群、すなわちその石田川期集落の墳墓として形成されたものであることは間違いのないであろう。

ところで、下佐野遺跡I地区、および寺前地区における周溝墓・前方後方形墳墓の規模は、次



### 第3章 調査の成果と問題点

表のごとく分類される。I地区A区の周溝墓で最大のものは、前方後方形を呈する第4号周溝墓で、全長25m、主体部分は辺16.5mで、前方部はくびれ部幅4.5m、前方部幅7.5mである。周溝の幅は4.0～5.0mで主体部分をめぐり、前方部前面は1.2m内外と狭まっている。この第4号周溝墓を除けば、いずれも方形プランを示すもので一辺が12.0～14.0mにおさまる規模のものが4基と多く、それを中心に、一辺が5.0m以上、16.0m以下という範囲におさまっている。前方後方形周溝墓の第4号墓は周溝墓群の中核的な地位を占めていることが推定される。一方、I地区C区を中心に、一部はD区南端にかかる周溝墓群は、いずれも方形周溝墓で、一辺が8.0～10.0mにおさまるものが3基、10.0～12.0mが2基、12.0～14.0mのものが2基で、8.0m以上、14.0m以下のものが多くを占めている。最大のものは16.0～18.0mにおさまる規模で、I地区A区の第4号周溝墓と主体部分のみの規模はほぼ同じである。このことは16.0～18.0mの規模の方形周溝墓がI地区C区の周溝墓群の中核的地位を占めていたことが推定され、それらのなかからI地区A区第4号周溝墓のように、前方後方形周溝墓を採用するものが出現していたことがうかがえる。そして、それぞれの周溝墓の間にこのような規模の違いが存在することは周溝墓を営んだ集落内の家族間に家族構成や生産力の上での格差が生じており、その格差を踏えた集落内における社会的秩序が成立していたことを示しているものと思われる。

こうした傾向は、最近の調査において、いくつかの遺跡においても認められる。玉村町下郷遺跡では、前方後方形周溝墓とされるものが、前方後円墳の天神塚古墳に先立って出現しているがそのS Z 42号周溝墓は全長42m、後方部は1辺22.6mである。その規模から見れば、下佐野遺跡寺前地区9号古墳に匹敵する。下郷S Z 42号墓には、周囲に方形周溝墓が分布し、それらのなかでも、前方部前面(南位)に位置するS Z 03号墓は1辺12mの規模、S Z 18号墓は1辺17mの規模で並設している。また、くびれ部左側(東南位)にも1辺10mの規模のS Z 19号墓が位置している。これらの周溝墓の位置関係を見ると、その方向などに整合性が認められる。主墓とその付設墓という関係が認められよう。

高崎市元島名町鈴ノ宮遺跡においても、周溝墓群のなかに前方後方形周溝墓が存在する。その第7号墓は全長25.5m、後方部が1辺12.5mという規模で、同群を構成する方形周溝墓のうち最大の第1号墓の1辺21.6mという規模に比べると、後方部規模は飛躍的に大形化しているともいえない。大形の方形周溝墓を営む集落内の家族のなかに、前方後方形周溝墓を採用するものが出現したものと推定され、それは、下佐野遺跡I地区A区の第4号周溝墓と同じ様相を示している。

こうした周溝墓群の形成は、集落同体の変質を意味するものと考えられ、集落内に新しい社会秩序が成立していったことを示しているものといえよう。前方後方形周溝墓は集落共同体の族長的性格を有する有力家族長が、外的な影響のもとに、集落の首長としての性格を保持するようになり、採用することになったものと考えられるのである。それにたいして大形の前方後方形周溝墓ないしは前方後方墳は、そうした集落を統合し、地域形成を進めた地域首長のものと推定される。大首長のもとに集落社会を主導するいくつかの村落首長が集まり、地域社会を形成するとい

### 第3節 高崎市東南部、倉賀野・佐野地域の古墳形成と発展

うヒエラルヒーが、その当初から確立していたことをうかがわせ、下佐野遺跡における寺前6号墳、寺前9号墳は、烏川左岸の高崎市東南部地域に君臨した地域首長の墳墓であろう。下郷遺跡では、下郷SZ42号墳の周辺部に方形周溝墓が分布し、その分布のあり方には盟主墓とその従属墓としての関係が推定できる。高崎市元島名町鈴ノ宮遺跡においても、前方後方形周溝墓と方形周溝墓とが混在する。前方後方形周溝墓の第7号墓は全長25.5m、後方部辺11.6～12.5mであり、方形周溝墓に比して規模は大形である。しかし前方後方形周溝墓の後方部規模をもって方形周溝墓の規模と比較すれば、方形周溝墓の大形のものといちぢるしい差は認められない。下佐野遺跡I地区A区の第4号前方後方形周溝墓と同じように、大形の方形周溝墓を造営する家族のなかに前方後方形周溝墓を採用するものが出現したものと推定される。

こうした、前方後方形周溝墓のあり方を見ると、他のものに比べて大形ではあるものの、それが位置するグループ内にあって、特に抽んでた大きさではなく、前方後方形という形態を採用したものと、下郷遺跡のSZ42号墓のように抽んでた大形墓で、それも前方後方形という形態を採用しているものとが存在することが注意される。後者の場合、高い墳丘を構成するものであったのか、その辺は明らかでないが、これに近い規模の下佐野遺跡寺前地区6号古墳・同9号古墳が墳丘を構成する前方後方墳であった可能性は強く指摘されるところである。前方後方形周溝墓は、前方後方墳の形態を、集落共同体内における族長的性格を有する地位にあったものが採用することになったものであろう。前方後方墳の被葬者は、集落共同体を統合、支配した地域首長の地位を確立していたものであろう。その意味では、下佐野地域にあっては前方後方墳の被葬者を盟主とする地域のヒエラルヒーは、石田川期集落が形成される初期の段階から整っていたとすべきであろう。高崎市東南部の倉賀野台地の沖積平野地域においても、前橋南部の前橋台地の沖積平野

下佐野遺跡の周溝墓・前方後方墳

	規 模	I 地 区 A 区		I 地区C区・D区		寺 前 地 区		II 地区 7 区		計
		個 所	計	個 所	計	個 所	計	個 所	計	
方 形	4.0 ～8.0	8号、9号	2					1号、2号、5号	3	5
	8.0 ～10.0	12号	1	C区3号・C区6号 D区2号	3	3号	1			5
	10.0 ～12.0	1号、2号、6号	3	C区2号・C区8号 D区1号	3			3号、4号	2	8
	12.0 ～14.0	5号、7号、10号	3	C区5号、C区7号	2					5
	14.0 ～16.0	3号	1							1
	16.0 ～18.0			C区1号	1					1
	不 詳			C区4号	1					1
前 方 後 方 形	16.0 ～18.0	4号(全長25m)	1							1
						◎6号(全長約38m)	1			1
						◎9号(全長42m)	1			1
計			11		10		3		5	29

### 第3章 調査の成果と問題点

地域と同じように地域形成の動きが、まさに雨後の筍のように展開されたが、その一つの拠点に下佐野地区を中心とする烏川左岸の地域があったのである。そして、その地域首長の地位に就いたのが、寺前地区6号古墳・同9号古墳の被葬者と考えられる。その墳丘形態から見て、6号古墳が先行し、9号古墳が後出するという継続的關係をもって出現したものと推定される。

#### 4 下佐野長者屋敷天王山古墳の性格

下佐野遺跡Ⅰ地区A区に存在した長者屋敷天王山古墳からは、明治45年(1912)3月15日、副葬品が発見され、それらは一括で、発見者により帝室博物館(現東京国立博物館)に寄贈されている。今、同博物館に収蔵されている当該資料は、内行花文鏡1面、変形珠文鏡1面、滑石製勾玉10個、碧玉製管玉13個、ガラス製小玉8個、水晶製算盤玉2個、滑石製白玉一括、軟玉製石釧2個、滑石製刀子2個、滑石製斧2個、滑石製鏝1個等である。これらの遺物類のうち、鏡類は2面とも仿製で、内行花文鏡は径8.0cm、内区は六花文、鈕の摩滅が顕著であり、朱が一部に残っている。珠文鏡も径8.0cm、包んだ布が錆化して表面を覆っているが、X線写真によると内区は6分割し、その各区に珠文座乳を配している。現在、県内で発見されている内行花文鏡は、次表のとおりであり、舶載とされるものは、4点、他は仿製鏡で、内区は六花文のものが5点と、圧倒的に多いことが注意される。これらの仿製六花文内行花文鏡を出土した古墳について見ると、時期的にさかのぼるものと推定されるのは、高崎市紫崎蟹沢古墳や太田市新野越巻所在とされるものであり、最近では、本古墳の南側に隣接するⅠ地区A区の第4号周溝墓、渋川市行幸田山所在周溝墓等がある。仿製六花文内行花文鏡は、古墳時代初期の石田川期の村落共同体の族長の一部が所持する鏡であったことが推定される。一方、赤堀茶臼山古墳(南柳)や白石稲荷山古墳(東柳)にも副葬されており、5世紀中葉期の地域首長の墳墓の副葬品を特徴づけている。

県内における仿製内行花文鏡の副葬例は、石田川土器文化の成立した古墳時代初期の段階から地域首長勢力の支配機構が確立し、各地に前方後円墳・帆立貝型古墳が出現する和泉期、すなわち、4世紀後半から5世紀中葉に集中している。このことは、石田川期の地域形成期以来、その中心的地位を占めた村首長層と、その系譜に連なり、勢力を拡大した地域首長層が、彼等の職能を保持する祭祀・神宝の器として内行花文鏡を保持するようになったことを意味していよう。

長者屋敷天王山古墳は、発掘調査の結果、径42mの円墳の可能性が強い、周堀幅は10m~14mである。このような規模の墳丘をもった円墳は、下佐野遺跡区内からは明らかでない。天王山古墳の南方約250mの地に発見された古墳跡、Ⅰ地区A区の第2号墳が径30mの円墳で、幅6m~8mの周堀をめぐらしている。周堀内埋没の土器類は石田川期であり、天王山古墳とはほぼ同時期である。前方後方墳、方形周溝墓や前方後方形周溝墓を除くと、石田川期の土器類を伴う古墳は、天王山古墳と第2号墳の2基のみである。周溝墓群を形成した村落社会のなかから、このクラスの円墳を採用するものが出現することになったことをうかがわせる。彼等は、おそらく、方形周溝墓群を形成した村落社会にあって、首長性格をより強固にし、地域政権のセカンダリクラス



の地位についたものだったと思われる。

天王山古墳出土の遺物とされるものを検討すると、より古代の様相を示しているのは、仿製内行花文鏡のほか、軟玉製石釧と碧玉製管玉である。これらのものは共伴したものと推定して不思議はないが、他の遺物は、それらに比べると、時代的に後出する性格をもっている。石製模造品としての滑石製刀子・斧・鑿・勾玉などはつくりも具象的であり、石製模造品としては時代的に古式の様相である。軟玉製石釧・管玉とはあまり時期の離れたものでなく、継起的に位置づけられる時期のものであろう。天王山古墳の遺物の出土状態は明らかでないが、県内はおろか、東日本の古式古墳の代表格ともいえる前橋・天神山古墳にも石製模造品の出土例がある。天神山古墳ではくびれ部南面周堀縁に近い墳丘葺石間に残存した滑石製刀子が発見されている。祭祀用具の一つとして、古墳築造後ある年月を経て供献されたもののようである。天王山古墳の石製模造品も、そうした性格を有するものであった可能性は無視出来ない。他の滑石製白玉や水晶製算盤玉などは、更に時代は下るものでその共伴関係は否定されるべきものであろう。いずれにしても、長者屋敷天王山古墳の成立年代は、石田川式土器がまだ使用されていたが、その石田川式土器を使用した社会にあって、階層的分化が進展し、村社会の新しい支配秩序が形成される5世紀前半も、第1四半期に近い時期に位置づけるのが妥当ではないだろうか。

このような、5世紀代前半も比較的早い時期に位置づけられる中規模古墳は、烏川中流の左岸地域、すなわち、高崎市東南部の平野地域にあっては、長者屋敷天王山古墳の東南方約1200m、下佐野町字戸崎から字翁前の地内に分布する茶臼山古墳（佐野村第53号墳）や大山古墳（佐野村第52号墳）が注意される。茶臼山古墳は、現在は削平されてしまって跡方もないが、径60m内外の円墳、あるいは帆立貝形墳と推定され、副葬品のなかに古式古墳の様相を示す琴柱形石製品がある。大山古墳は、茶臼山古墳の北約100mの地にある円墳で、現存する。墳丘は径60m、高さ7m、頂上部平坦面径10mで、墳丘は円錐台状を呈しており、葺石・埴輪円筒類も存在する。鏡と石製品が出土したという伝承があるが、墳丘の形態は古式古墳の様相をもっており、5世紀前半期に位置づけられる古墳であることは間違いない。そして、ここで注意したいのは、長者屋敷天王山古墳と、下佐野Ⅰ地区2号古墳というアツセンブリッジにたいして、茶臼山古墳と大山古墳というアツセンブリッジが対応し、約1000m離れ、しかも、その間は生産のフィールドとなった低湿な沖積地が横たわっており、古墳群形成としては二地域に分れるということである。大山古墳の北方約500mの字亀甲地内には、鏡、刀類、土器などを出土した庚申塚古墳（佐野村第62号墳）が、沖湿地の東側に延びる微高地上に位置している。古墳群形成の上では後者の茶臼山古墳、大山古墳、庚申塚古墳というアツセンブリッジをなしていたと思われる。そして、天王山古墳群形成には下佐野遺跡群の村を形成した石田川期集落が深くかかわっていることは明らかであるが、大山古墳群は、それとは別の村を形成した石田川期集落が深くかかわって成立したものであろう。大山古墳の東方約350mには倉賀野万福寺遺跡がある。あえて云うならば、万福寺遺跡は大山古墳群を形成した首長層と直接かかわりをもった集落と、その周溝墓群であったのではないかと推定したい。

### 第3章 調査の成果と問題点

このことは、石田川系土器文化を担った烏川左岸の倉賀野台地の沖積平野に入植した村人達は村首長の指導のもとに結成された単位集団であり、この単位集団の村は、灌漑水利等で地域的に利害を共有する他の単位集団の村々と寄り集まる形で、一つの地域圏を形成したものであったことをうかがわせる。その地域圏の形成の頂点に位置したのが、その初期にあつては、下佐野第4号のごとき前方後方形周溝墓を造営した首長層であり、その支配権を継承発展させた天王山古墳や大山古墳のごとき大形円墳を構築した首長層であつたのであろう。とにかく前方後方形周溝墓から円墳へという展開が見られるのである。このことは、一体何を意味しているのであろうか。下佐野、倉賀野地区の古墳形成を考える上で無視出来ないのは、倉賀野浅間山古墳、同大鶴巻古墳である。前者は全長168m、後円部径102m、前方部幅75mという規模であり、後者も全長120m、後円部径72m、前方部幅54mという規模である。両古墳とも周堀を有し、埴輪円筒列を配列した古墳である。その墳丘の形態は古式の様相を示しており、五世紀初頭から前半代に位置づけられるものであろう。

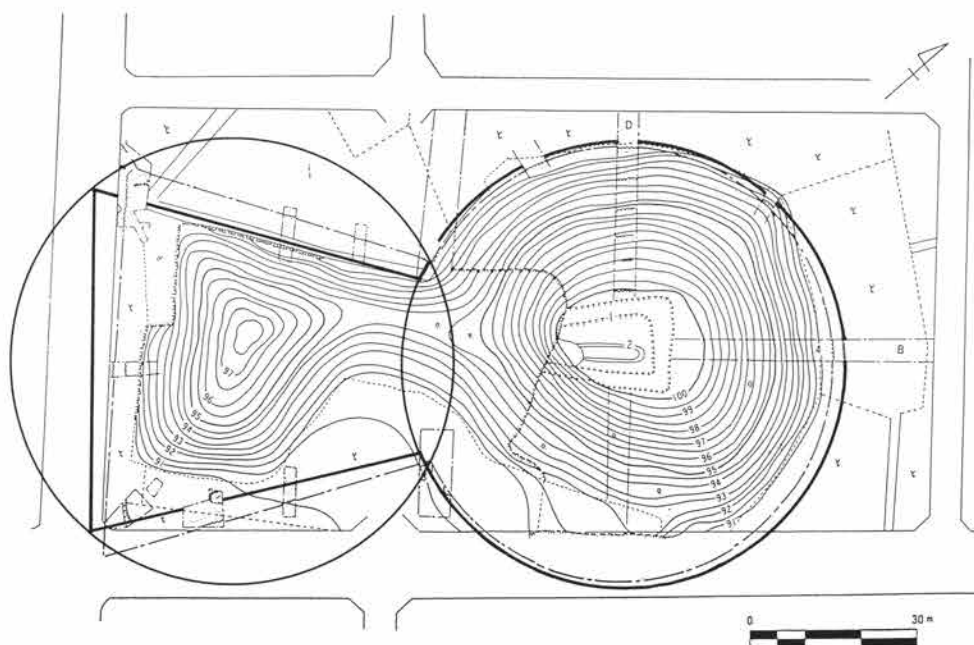
県内における前方後円墳として、初現的な様相をもっているものは、前橋天神山古墳が注意される。全長129m、後円部径75m、前方部幅68mで、周堀を設けており、墳丘部は葺石を施設しているが、埴輪類は存在しない、後円部墳頂部に底部穿孔丹塗壺形土器が配列されていた。主体部は、方形の土壇を後円部頂部から設け、その底部に墳丘主軸方向にあわせて内側の長さ7.8m、巾1.4mという長大な粘土槨を置いており、鏡5面、紡錘車4点、素環頭大刀1点、大刀4点、剣12点、銅鏃30点、鉄鏃78点やりかな8点、のみ3点、斧4点、釣針5点、埴1点などが副葬品にある。群馬県内における最も充実した内容を示しており、前方後円墳の初現を飾るにふさわしい古墳である。この前橋天神山古墳が利根川（現広瀬川筋）の右岸に広がる前橋台地の沖積地を開拓した入殖者集落を統合し、その頂点に位した豪族の古墳であることは、誰も疑わないと思う。4世紀後半から終末期に位置づけられ、隣接して位置する全長130mの前方後方墳、前橋八幡山古墳に引き続いて構築されたものと推定される。前橋八幡山古墳の主体部副葬品は明らかでないが、これに対応する出現期の様相をもつ高崎市元島名將軍塚古墳では、小形獣形鏡1点、石釧1点、鉄剣片、やりかな片等である。小形仿製鏡1面を中心として小量の構成である。このことは、東国における前方後方墳に見られる普通的な傾向であり、前橋八幡山古墳もそうした性格をもつ古墳と推定される。いずれにせよ前橋台地寄りの地域にあつては、古墳時代初期において地域に君臨した大首長の墳墓に前方後方墳から前方後円墳という形態の変遷があり、前方後円墳の造営段階になって、副葬品の性格が畿内大和政権と極めて結びつきの強い様相に変質しているのである。すなわち、前方後円墳は開拓期から地域統合への新たな進展をみるなかで、畿内、大和政権とのかわりを強化し、それを梃子に地域統合を進めた首長によって採用されたものであつたのであろう。

烏川寄りの倉賀野台地においては、初期に下佐野遺跡寺前地区6号墳、9号墳の2基の前方後方墳が前後して出現し、その後を受けて、浅間山古墳・大鶴巻古墳が継起的に出現したものと推

定される。前方後方墳から前方後円墳へというその展開を契機に5世紀代初頭に飛躍的な発展のあったことがうかがえるのである。

ところで、前橋台地や倉賀野台地地域における前方後円墳の変遷についてたどってみると、まず、前橋台地においては、前橋天神山古墳に後続する大規模古墳は明らかでない。前橋市文京町から東南方向に延びる広瀬川(旧利根川)の右岸河崖縁に沿っては山王町にかけて、「上毛古墳総覧」によれば、149基の古墳が存在した、そのうち、前方後円墳とされるものは、八幡山古墳、天神山古墳を含め、15基としている。しかし、確実に前方後円墳として把握できるのは8基にしかすぎない。そして、5世紀代に位置づけられるのは、八幡山古墳西北方に存在した全長80mの規模をもち、竪穴系主体部で石製模造品、馬具類を出土した鶴巻古墳である。しかし、副葬品の性格から見てその構築年代は5世紀末をさかのぼるものではないであろう。他は、いずれも6世紀に位置づけられるものであり、全長104mの天川二子山古墳のごときは6世紀後半のものと考えられよう。前橋天神山古墳の出現以降、それを凌駕する規模の前方後円墳は存在せず、また、前橋天神山古墳に継起する大規模前方後円墳は、前橋台地からは姿を消しているのである。前橋天神山古墳の被葬者首長が確立した首長権を継承した首長は、前橋台地にその墳墓を営なむことはなかったといえる。他の地域に移るか、前橋台地を包括するより広い地域統合が進み、他の地を墳墓造営の地を定めたのではないかと推定される。前橋天神山古墳の後に出現する大規模前方後円墳は、倉賀野浅間山古墳と考えられ、その墳丘形態は、規模こそ異なるものの同一の設計法にもとづいて企画された墳丘である。すなわち、倉賀野浅間山古墳は前橋天神山古墳の系譜にあるものであり、5世紀初頭において、前橋台地、倉賀野台地という利根川本流と烏川とにはさまれた広大な地域を統合し、毛野政権の形成に成功した首長の墳墓と推定されるのである。前橋天神山古墳の首長によって確立した毛野政権の宗主権は、倉賀野浅間山古墳の首長に継承され、最終的には太田天神山古墳の首長に帰すものとなったのであろう。4世紀後半から5世紀前半にかけては、大筋において、以上述べたような毛野政権形成の動きがあったのである。

こうした毛野政権形成の推移するなかで、長者屋敷天王山古墳は、毛野政権内にあって盟主として君臨した浅間山古墳あるいは大鶴巻古墳の被葬者首長の支配下に組み入れられていった地域首長の墳墓と推定されるのである。



第377図 前橋天神山古墳と倉賀野浅間山古墳の墳丘平面企画模式図の対比  
(実線が浅間山古墳墳丘プラン)

墳丘の実際の規模は天神山古墳＝130m

浅間山古墳＝168mでその比率は1：1.29